

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-2 1

トイレを済ませた二人は、入り口側に設置されたベンチに座り、真紀手作りのアメリカンクラブハウスサンドを入れたバスケットと横田が淹れたコーヒーが入った保温ポットを二人の間に置いた。

真紀はひざ掛けナプキンとおしぼりタオルを横田に渡してから、バスケットの蓋を開ける。横田は慎重にコーヒーを紙コップに注いだ。二人は寒風の中で朝食をとりながら、S Aに出入りする多種多様な車や行き交う人々を何気に見ていた。

嵐山の地名に心当たりがある真紀は、数年前に嵐山カントリークラブで行われたM社主催のゴルフコンペに参加したことを思い出して、偶然のいたずらを感じとっていた。

「おっ！美味しいね。ローストチキンの代わりにローストビーフを使ったんだね！そのたびに思うのだが、料理のセンスも抜群だね。恐れ入るよ」と横田は嬉しそうに言った。

「飛び切りのコーヒーは、特別な味覚を添えて、体の芯まで温めてくれます」と真紀は両手で紙コップを持ちながら言った。

「ローストビーフとコーヒーは、我々にとって欠かせない小道具だね」などと横田はひとり悦に入っている。

「赤ワインと絵筆も仲間に入れてあげてください」と真紀は悪ふざけて言った。

「あっ、忘れていた」と横田は真顔を作って同意してから笑って見せた。

「そろそろ車に戻りませんか」と真紀は相手を促した。

「うん、ちょっと体が冷えてきた。運転変わろうか」と横田は思いやりを見せる。

「大丈夫、ドライブも趣味の内ですから。いくら走っても全然疲れないの」と真紀は笑みを浮かべて答えた。

エンジンを始動させてから、「音楽を流してもいいですか」と真紀は訊いた。

「もちろんだよ。気遣いもほどほどにお願いするよ。貴女のそういった馴れ合いにならないところも好きなんだが……」

「わかりました。今日のために選曲したつもりですが、気に入ってくださるかしら？」

「ふーん。興味津々、楽しみだよ」と横田は笑って、シートベルトを締めた。

プレミアム・ツイン・ベストばら色の人生『エディット・ピアフ・ベスト』の二枚組アルバムのディスク1の中から、七曲目に収録されている『青のシャンソン』が車内に流れ始めた。